劉文淇の左傳學について

野間文史

一　劉文淇の生涯
　乾嘉の学／父劉錫瑜／劉寶楠／金陵の約／阮元
二　劉文淇の学問と著述
　洪梧／包世臣／凌曙
　（一）春秋左氏傳舊注疏證
　　長編／沈欽韓宛書簡／中国科学院歴史研究所
付録一　劉文淇家系図　（以上本号掲載）
　（二）左傳舊疏考正　（以下次号掲載予定）
　　劉寶楠／沈欽韓／黄承吉
　（三）その他の著書
　（四）劉毓崧と劉壽曾
三　左傳舊疏考正解題
　　自序／体裁／底本／包愼言／後世の評価／版本／附記（小沢文四郎『儀徵劉孟瞻年譜』）
付録二　劉文淇略年譜

一　劉文淇の生涯

劉文淇、字は孟瞻、江蘇省揚州府儀徴県の人。清の乾隆五十四年己酉（一七九）に生まれ、嘉慶・道光年間を経て、咸豊四年甲寅（一八五四）、六十六歳で没している。ちなみに彼の生年当時、いわゆる「乾嘉の学」を担った大家のうちで、

戴震は没後すでに十二年、

盧文弨は七十三歳（没年七十九歳）、王鳴盛は六十八歳（没年七十六歳）、錢大昕は六十二歳（没年七十七歳）、

段玉裁は五十五歳（没年八十一歳）、王念孫は四十六歳（没年八十九歳）、王引之は二十四歳（没年六十九歳）、

洪亮吉は四十四歳（没年六十四歳）、焦循は二十七歳（没年五十八歳）、阮元は二十六歳（没年八十六歳）

であった。したがって劉文淇は概略的にいえば、清朝の学術史上では「乾嘉の学」のしんがりに位置することになるであろうか。彼の最初の著作『左傳舊疏考正』は嘉慶帝の最後の年、二十五年（一八二〇）に書かれている。

またその生涯は、三十代以降から始まってその没年に至るまで、常に変わらぬ深い交遊関係で結ばれた同じ江蘇省寶應県の劉寶楠（字は楚楨　一七九一―一八五五）の生涯とほとんど重なっており、若年の頃からその盛名を斉しくして、当時「楊州の二劉」を以て称されたという。ただ劉寶楠がその従祖父の劉台拱（字は端臨　一七五一―一八〇五）を始め父の劉履恂（字は迪九　？―一七九五）に至るまで、代々家学を持った家柄であったのに対し、劉文淇の場合は父が医師であったため、彼自身がその家学、すなわち左傳学の祖と目されることになる。後に儀徴の劉氏四世（文淇・毓崧・壽曾・師培）と称された所以である。なお通例、「儀徴の劉氏」は「寶應の劉氏」とともに、阮元を筆頭者とする「楊州学派」のうちに数えられている。

さて劉文淇の父、劉錫瑜（字は懐瑾、一に琢齋）は早くに孤児となって生活は貧困を極めたため、儒書に易うるに医書を以てし、医術を志した。やがて経脈・薬石の術に精通したが、市医と利を争うことはせず、またしばしば貧者

からは代金を受け取らないという診療ぶりのため、暮らし向きはいっこうに良くはならず、やっとその家計に余裕が生まれたのは、錫瑜が六十歳になった頃だという。そして八十歳になって始めて往診を断わるまで現役を続けたのち、あっぱれ九十二歳の天寿を全うした。江淮の間では「篤行の君子」として聞こえたということである。文淇は錫瑜のただ一人の男子で、その誕生は父四十一歳の時であった。

劉錫瑜は、やむを得ぬこととはいえ、自らは学問への道を失い、先人の儒業を受け継がなかったことを不孝と見なし、その子文淇には学問を以て身を立てることを強く、また厳しく望んだ。文淇はその期待に応え、幼時より聰明であった。八歳の時から外傅に就いて学んだが、塾から家に帰ると、父はその日に習得したことを目の前で復習させ、一燭を尽くすを常とした。その時、母の部屋には灯が無く、彼女は黙して座したまま、文淇の誦声を聴くのを楽しみとしたという。そして十四歳以降は、揚州にあった梅花書院において洪梧（字は桐生、安徽省歙県の人　一七五〇—一八一七）から学業を受けることになる。同学に薛傳均（字は子韵、江蘇省甘泉の人　一七八八—一八二九）がいた。そのころ或る人が、童幼に教えれば収入が得られると勧めたところ、たまたま父が不在であったが、母は文淇の学問が未熟であるとして、許可しなかった。彼女は常々、文淇には読書に専心すべく、家事に思いを残してはならぬと戒めていたのである。そして科挙に応じるための旅費は、しばしば母の着物を売ることによって充てられたという。やがて洪梧に従って学ぶこと四年、洪梧が書院を去った後、はじめて教授に携わるようになり、いささかなりとも家計を助けることができることを喜びとしたことであった。

また、母の十八歳年少の弟が、後に『春秋繁露注』を著作し、公羊学者として名を残すことになる凌曙（字は曉樓、江蘇省江都の人　一七七五—一八二九）であったため、彼からも学問の手ほどきを受けたことが当然予想されるであろう。そしてこの舅氏を通じて多くの学者の知遇を得ることにもなるのである。

なお当時、揚州の地は交通の要衝で、文人墨客の往来が甚だ盛んであったという。『清儒學案』巻一百五十二・孟

瞻學案には「孟瞻交游」として、

阮元　（字は伯元　江蘇省儀徴の人　一七六四—一八四九）
黄承吉（字は謙牧　江蘇省江都の人　一七七一—一八四二）
包世臣（字は愼伯　安徽省涇の人　一七七五—一八五五）
沈欽韓（字は小苑　江蘇省呉の人　一七七五—一八三一）
汪喜荀（字は孟慈　江蘇省甘泉の人　一七八六—一八四七）
丁晏　（字は儉卿　江蘇省山陽の人　一七九四—一八七五）
陳立　（字は卓人　江蘇省句容の人　一八〇九—一八六九）
劉寶楠（字は楚楨　江蘇省寶應の人　一七九一—一八五五）
張穆　（字は石州　山西省平定の人　一八〇五—一八四九）
羅士琳（字は茗香　江蘇省甘泉の人　一七七四—一八五三）
包世榮（字は季懷　安徽省涇の人　一七八四—一八二六）
包愼言（字は孟開　安徽省涇の人　？—？）
姚配中（字は仲虞　安徽省旌徳の人　一七九二—一八四四）

といった学者の名を列挙しているが、これらのうち当時の学術界の巨頭であった同郷の阮元の二十六歳年長は別格として、張穆の十七歳、黄承吉の十六歳、沈欽韓・羅士琳の十五歳、包世臣の十四歳、それぞれ劉文淇より年長であるのを除けば、ここに名が挙がっていない他の交遊を含めて、その多くが同世代の学者であった。ちなみに弟子の陳立のみが二十歳年少である。劉文淇が右に挙げたうちの先輩学者から「乾嘉の学」の遺産を継承していることは申すまでもないが、しかしその学問形成は、主として同世代の人々との間における切磋琢磨によった部分が大きいのではないかと思われる。[1] そのことを象徴するのが、以下に紹介する有名な逸話である。

道光八年（一八二八）の秋、劉文淇四十歳の時のこと、省試を受験すべく金陵に赴いたが、このとき同宿となったのが、やはり省試に応じるため金陵に集った劉寶楠をはじめ梅植之（字は蘊生、江蘇省江都の人　一七九四—一八四三）・包愼言・柳興恩（字は賓叔、江蘇省丹徒の人　一七九五—一八八〇）、そして陳立であった。かねてより文淇・寶楠の二劉は、唐人の「十三經注疏」に混乱の多いことを不満としていたのであるが、『尚書』・『爾雅』、そして『孟子』にはすでにそれぞれ

江聲　（字は鯨濤、江蘇省呉の人　一七二一—一七九九）の『尚書集注音疏』十三巻、

孫星衍（字は伯淵、江蘇省陽湖の人　一七五三—一八一八）の『尚書今古文注疏』三十巻、
邵晉涵（字は二雲、浙江省會稽の人　一七四三—一七九六）の『爾雅正義』二十巻、
郝懿行（字は蘭皐、山東省棲霞の人　一七五七—一八二五）の『爾雅義疏』十九巻、
焦循（字は里同、江蘇省甘泉の人　一七六三—一八二〇）の『孟子正義』三十巻

というように、清朝考証学の成果を踏まえた、いわば清朝の「新疏」が著作されているからには、我々もまたこれら先学の著作に続けるべく、残りの経書に対する「新疏」を作成しようということで、劉寶楠は『論語』を、柳興恩は『穀梁傳』を、陳立は『公羊傳』を、そして劉文淇が『左傳』を担当する約が成ったというのである。もっとも、二劉はこの時より以前にすでに『左傳』と『論語』の分担を約していたものと思われ、これに他の者が同調したというのが事実に近いであろうか。

周知のように、後世この約は『論語正義』・『穀梁春秋大義述』・『公羊義疏』として果たされたのであるが、ひとり劉文淇の『春秋左氏傳舊注疏證』のみが未完成に終わるのである。その主たる原因として先ず考えられるのは、なによりも『左傳』自体の分量の多さであろう。『左傳』に次いで大部な『禮記』にも、ついに「新疏」が作られなかったことが、そのことを示している。この約の成って幾ばくもない頃のことと思われるが、劉文淇が沈欽韓に宛てた手紙の中で、草稿はほぼ出来上がっており、さらに期するに十年の功を以てすれば完成させられるであろう、と述べているが、まことに遺憾ながら事はそのようには運ばなかったのである。

もっとも『論語正義』の場合も、その事情にそれほど違いは無かったといえようか。この書も完成を目前にして劉寶楠は道山に帰してしまい、遺志を継いだ次子の劉恭冕（字は公俛　一八二四—一八八四）によってやっと完成され、その写定を終えたのは劉寶楠の没後十年の同治四年（一八六五）のことであった。「金陵の約」から実に三十七年目のことである。しかもその刊行はさらに十年後の光緒初年のことであるという。[2] なお先に紹介した「金陵の約」の逸話は、劉恭冕の

『論語正義』後序と、当事者でもあった陳立の手になる『論語正義』序等に見えるものである。

ちなみにまた陳立自身の『公羊義疏』の刊行も、やはり容易なことではなかった。原稿そのものは『論語正義』写定の頃にはほぼ同様に完成していたようであるが、その三年後の陳立の死に及んでも、刊行されるには至らなかったのである。この『公羊義疏』をも収録した王先謙（字は益吾、湖南省長沙の人　一八四二―一九一七）編纂の「皇清經解續編」が完刻されたのは、光緒十四年（一八八八）のことであった。当時における著述とその出版は、我々の想像以上に厳密で、しかも困難であったのだ。

ところで、劉文淇は五十歳前後の頃かと思われるが、同郷の先達、阮元との交遊が始まり、阮元の委嘱で、その子の劉毓崧等とともに『宋元鎮江府志』の校訂と校勘記作成の事業に携わり、ついで『舊唐書』の校訂と校勘記作成、さらには『儀徵縣志』等の編纂にも従事するようになった。そしてこの仕事が、以後没年近くに至るまで続けられたようで、あるいはこのことによって『左傳』研究に専心できなかったことも予想されるため、これを『舊注疏證』未完の一因に挙げてよいかも知れない。この他にも、劉文淇が校讐に精密であるところから、他人の書物の校勘を依頼されることが多くなり、また同郷の先輩や亡友の遺稿が世に行なわれることを願い、これらの遺稿の整理とその刊行のための醵金を募るといった、自分の仕事以外にもあれこれと心を砕き、時間を費やす五十代以降の日々であった。

咸豊三年、太平天国の乱が起こり、揚州城が陥落したことにより、その一生のおおむねを揚州の地で過ごした劉文淇は、難を邵伯に避けざるを得なかった。この時、友人の揚亮（字は季子、江蘇省甘泉の人　一七九七―一八五三）は絶食して死に、すでに老齢であった包世臣は難を避ける途中に没し、羅士琳は賊の殺すところとなったという。翌年、乱が収復された後、揚州に帰ることができたものの、首筋にできた癰が原因で、劉文淇は唐突にその死を迎えることになる。父劉錫瑜の九十三歳の長寿を思うとき、あるいは当人も予想しなかったことであったかもしれない。かくしてやむなく大業の完成はその子の劉毓崧、そしてさらには孫の劉壽曾・貴曾に託されるわけであるが、それについては次

節に述べるであろう。

ちなみに劉文淇は科挙に応ずること十四度、ついに登第することができなかった。そして劉寶楠もまた同じく科挙に応ずること十余度、しかし彼の方は道光二十年、その五十歳の時、とうとう進士出身を賜わったのである。子の劉恭冕によって完成された『論語正義』と、子そして孫の代に至っても未完成に終わった『左傳舊注疏證』という二劉の対照に、深い感慨の念を催さざるを得ない。劉文淇が友人汪穀（字は小城、江蘇省儀徴の人　一七九四—一八二八）のために書いた「文學汪君傳」において、「今の世には科學速化の學有りて、皆な經に通じ古を學ぶを迂と爲す」（『青溪舊屋文集』巻八）と述べる言葉は、彼自身の学問の性格を象徴しているであろうか。[3]

（1）たとえば、劉寶楠との交遊が始まった頃のことを回顧して、文淇は「余、弱冠より後、里中の薛子韻（薛傳均）・涇の包季懷（包世榮）・包孟開（包愼言）・旌德の姚仲虞（姚配中）・丹徒の柳賓叔（柳興恩）と經史を泛覽す。楚楨、因りて諸君と交はるを得、相與に切磋して友朋の極樂を爲す」と述べている（「題江淮泛宅圖序」『青溪舊屋文集』巻四）。

あるいはまた、丁晏が劉寶楠「楚楨詩文集」に寄せた序に、「當時、二劉の目有り。二君は既に余と同譜なり。孟瞻は余に長ずること五歳、楚楨は余に長ずること三歳、交はりは久しくして且つ敬す。淮（安）と揚（州）とは相距たること三百里なるも、書翰往來し、皆な問學を以て相切劘（切磋琢磨）す。大比（科挙）の歳に至る毎に、省會（省都）に聚首し、朝夕過從し、或は公車に同行し、講貫（研究）に虚日無し」という記述がある。

さらにはまた、丁晏が『禮記闡注』を著したとき、劉文淇が「賈公彦の儀禮・周禮疏に皆な『釋曰』と稱するは、鄭注を釋せるを謂ふ。いま子も亦た鄭の意を解釋するに、何ぞ『釋注』と曰はざる」と助言したた

め、これを是として丁晏は『禮記釋注』と名を改めたという（『禮記釋注』序）。同学の士が互いに意見を交換し、研鑽し合っていたことが伺えるであろう。

（2）　通説では『論語正義』は同治五年に刊行されたことになっている。たとえば劉文興『劉楚楨先生年譜』、近くは近藤春雄氏『中国学芸大事典』（大修館書店　一九七八年）等。しかしこれが誤見であり、その刊刻は光緒初年にまで降ることは、かつて藤塚鄰氏『論語總説』（弘文堂　一九四九年）が四証を挙げて詳説されたところである。

（3）　咸豊三年二月、太平天国の乱を避けて邵伯に移り住んだ劉文淇は、その年の十二月十日、市場の古本屋で偶然に「漢延熹西嶽華山廟碑」の拓本を発見し、これを購入した。劉文淇はその感激を、「晨夕に展玩しては、遂に憂ひを忘るるに至る。天は殆ど余の衰老を憐れみ、聊か此を以て羈秋寂寞の時を慰藉せんとするか。抑そも神物には知有り。久しく故紙の堆中に晦（くらみかく）れたれば、余の鑒別をして其の瓌寶〔めずらしきたから〕を著さしめんと欲するなり」（「漢延熹西嶽華山碑舊拓本跋」『青溪舊屋文集』巻七）と記している。かかる国難の状況にあっても、劉文淇の関心はひたすら書物の中へと向かっていくのである。

二　劉文淇の学問と著述

本節では劉文淇の学問を、その著述を通して述べることとするが、その前に、彼の学問形成の初期に少なからぬ影響を与えたと思われる三人の人物、洪梧・包世臣・凌曙について略説しておきたい。

先ず劉文淇が梅花書院で教えを受けた洪梧（一七五〇—一八一七）は、字は桐生、安徽省歙県の人で、乾隆五十五年に進士となった。翰林院編集を授けられ、勅を奉じて『全唐詩』纂修の事業に参画し、出でて山東沂州府の知事となり、後に揚州の梅花書院に講じている。著書に『易箴』二巻が有ったという。劉文淇が梅花書院に至ったのは嘉慶七年、彼

が十四歳の時のことで、洪梧はこの時五十三歳であった。これは舅氏凌曙の勧めでもあったようだ。そして凌曙自身もまた洪梧に教えを乞うているのである。後、嘉慶二十二年に洪梧が没した際、受業生が「祭洪桐生師文」をものしており、そこには包世臣・翟愼典・凌曙・包世榮・薛傳均に続けて、最後に劉文淇の名が見えている。

そして凌曙は、その最初の著作『四書典故覈』に洪梧の序文を頂いているが、彼の名を不朽ならしめた『春秋繁露注』は、洪梧の助言によるところが多いことを、やはり洪梧自身の手に成る『春秋繁露注』序によって伺い知ることができる。したがって凌曙の学問形成にとって、洪梧はかなり重要な人物であった。

これに対して、劉文淇が洪梧から如何なる影響を受けているかについては、いまひとつ審らかではない。先の『四書典故覈』序によると、洪梧が梅花書院に講ずるや、「諸生と通經の學を爲さんと欲し、首に公羊通禮・周官六聯表説、及び論孟水地通釋・儀禮十七篇節目詳攷・左傳五十凡論・詩經通禮を纂せしめ」たと自らの教授要領を述べている。洪梧が梅花書院を去ったのは嘉慶十一年のことで、教えを受けた四年間に、劉文淇はおそらく経書全般に亘る学問の基礎を習得したのであろう。なお洪梧の蔵書は極めて豊富であったという。凌曙や劉文淇を始めとする貧書生にはまことに有難い存在であった。

嘉慶九年、劉文淇はまた凌曙を介して安徽省涇県の包世臣（字は愼伯　一七七五—一八五五）の知るところとなった。この包世臣の交遊関係は極めて広く、洪梧とも親交が有って、凌曙の学問にも強い影響を与えた人物であるが、彼はまた劉文淇が頴敏誠樸にして善く書物を読むのをこよなく愛した。そして凌曙には鄭氏禮を、また劉文淇には毛・鄭詩を治めることを助言した。これがきっかけとなって、嘉慶十三年、後に『學詩識小録』・『毛詩禮徵』を著す彼の弟の包世榮、さらには族子の包愼言といった、同世代の俊秀と知り合うことになる。劉文淇自身の述懐によると、二十歳の時、友人から『毛詩疏』を借りて書写したということであるが、この友人とはあるいは包世榮であったかも知れない。以後、順次「十三經注疏」全体へと劉文淇の学問は進んでいくのである。

このように包世臣は、若年の学者の才能を見抜き、その人にふさわしい同学の士を紹介することを得意とした人物であるようだ。なお支偉成『清代樸學大師列傳』では、包世臣は「治事學家（もと經濟學家と題されていた）」に列せられている。実学に重きを置いた人物でもあった。晩年にその著作『管情三義』・『齊民四術』・『中衢一勺』、そして『藝舟雙楫』を合わせて『安吳四種』として刊刻している。

さて以上述べてきたところからも分かるように、舅氏の凌曙は洪梧・包世臣の二人以上に、劉文淇の学問形成の初期にあって重要な人物であった。桂文燦（字は子白　一八四九—一八八六）の『經學博采録』巻五には「其の學は實に上舍（凌曙）よりす」という記述が見える。ただ、具体的な学問上の影響ということになると、実はあまり明確ではない。「春秋学」という点で共通するともいえるのであるが、しかし凌曙が清朝における代表的な公羊学者であったのに対して、劉文淇の学問は言うまでもなく『左傳』を中心に据えたものであった。後年の道光十年、亡き凌曙の『公羊禮疏』のために劉文淇は沈欽韓に序文を依頼しているが、その少し前の沈欽韓の来書には、「貴君の尊舅が劉逢禄といった輩の誤る所となり、公羊に溺れているのに対して、貴君がひとりその余波に染まっていないのは、まことに卓越した見識である」と称讃しているところからすると、劉文淇の学問が凌曙の公羊学とは一線を画するものであったことが分かるであろう。ただ、凌曙の公羊学が鄭玄の禮学から出発して、それ以前には無かった最初の『春秋繁露』の注釈書を完成させ、ついで『公羊禮疏』・『公羊禮説』を著作しているように、「禮学」を基本として、いわゆる「実事求是」を旨とした学問であったことが、この舅と甥とを繋ぐ太い絆であったと思われる。

そして幼少より聡明であった劉文淇に凌曙が期待するところは大きく、若年の頃から貧困で常師とて無い苦労を知り尽くした凌曙自身が、同じような境遇にある甥に対して、いろいろと目を掛けたことは想像に難くない。劉文淇もまた終始舅氏に対する敬意を失わなかったことは、凌曙の多数の著作に対して序文を書き、その著作を集めた「蜚雲閣凌氏叢書」を刻していることからも、容易に了解できるところである。後年、凌曙の没した後、今度はその遺児の

面倒を見ることになるのである。

以上、劉文淇の学問形成の初期に係わりのある人物を中心に述べてきたが、以下では、劉文淇の著作を通して、そのほかの交遊関係にも言及しつつ、彼の学問の性格を検討してみよう。

（一）春秋左氏傳舊注疏證

未完に終わった『春秋左氏傳舊注疏證』ではあるが、劉文淇の学問の性格は何よりもこの書物によって明らかになると思われるので、これから始めることとしたい。

さて『春秋左氏傳舊注疏證』はどのような方針のもとに著述されるはずであったのか。このことについては、前掲の劉恭冕『論語正義』後序が述べるところが大いに参考となる。ここには『論語正義』著作の基本方針が次のように述べられている。

焦氏の孟子正義を作りし法に依り、先づ長編を為りて数十巨冊を得たり。次いで乃ち薈萃して之れを折衷し、専己の学を為さず、亦た漢宋門戸の見を分かつを欲せず。凡そ聖道を発揮し、典礼を証明し、実事求是を期するを以てするのみ。

これによると『論語正義』は焦循の『孟子正義』に範を取り、先ず「長編」を作り、これをもとに取捨選択を加えて要点をまとめる。その際に漢学・宋学の学派の別にはとらわれず、あくまでも「実事求是」を期したと述べるものである。ここにいう「長編」とは、もともと編年史を編纂するに当たり、先ず諸文献から資料を収集し、これを事件・年次によって配列したままの書物、いわば生の資料群を指すもので、司馬光が『資治通鑑』を編纂するに先だって『資治通鑑長編』を作ったことがよく知られている。あるいはまた段玉裁が『説文解字注』三十巻を著作するに際しても、その「長編」としての『説文解字讀』五百四十巻を準備したという例を挙げてもよいであろう。『春秋左氏傳舊注疏證』

もまたこの方針によったものである。

したがって前節でも紹介した劉文淇の沈欽韓宛書簡の中で、「草稿は粗ぼ就りたれば、期するに十年の功を以てすれば、或いは此を成すべし」という「草稿」とは、この「長編」を指すものであろう。劉毓崧「先考行略」（『通義堂文集』巻六）によると、『舊注疏證』長編は八十巻であったという。

しからば『舊注疏證』長編を作成するに当たり、劉文淇は如何なる考えのもとに資料を収集したのか。それを知るには、劉文淇自身の語る言葉を聞くにしくはない。三たび沈欽韓宛書簡である。この手紙は道光十年前後に書かれたと推定されるから、「金陵の約」の成った二年後ということになる。やや長文ではあるが、劉文淇の主張が明確に語られているので、以下に紹介したい。

前歳、尊著『左傳補注』を得て、已に副本を録し、披き尋ぬること再四なり。竊かに歎ずるに、『左氏』の義は杜征南〔杜預〕の爲めに剝蝕せらるること已に久し、と。先生、雲を披き霧を撥き、學に從ふの士をして復た白日を覩しむるは、其の功たるや盛んなり。杜注を覆勘するに、眞に疢痏（うちきず）の横に生ずるを覚ゆ。其の稍や觀覽すべきものは、皆な是れ賈・服の舊説なり。洪稚存〔洪亮吉　江蘇省陽湖の人　一七四六—一八〇九〕大史の『左傳詁』一書は、杜氏の賈・服を剽襲するものに於て、條ごとに擧げ件ごとに繫くれば、杜氏は已に能く其の醜を掩ふ莫し。然れども猶ほ未だ全からざるに苦しむ。

文淇、韋昭の『國語』注を檢閲するに、其の杜氏の襲取する所と爲るもの、正に復た少なからず。夫の韋氏の注は、自ら己が意を出だすものを除き、餘は皆な賈・服・鄭君の舊説なり。杜氏の掩取の贓證は頗る多し。竊かに自らをば量らず、『左氏疏證』を爲らんことを思ひ、『左氏』の原文を取り、次に依りて排比し、先づは賈・服・鄭君の注を取りて疏通證明す。凡そ杜氏の排擊する所のものは之れを糾正し、剽襲する所のものは之れを表明す。其の韋氏を襲用するものも、亦た一一之れを疏記す。他の『五經異義』に載する所の杜氏の説の如きは、皆な『左

氏』の先師に本づく。『説文』引く所の『左傳』も亦た古文家の説なり。『漢書』五行志に載する所の劉子駿の説は皆な『左氏』一家の學なり。又た『周禮』・『禮記』の疏に引く所の『左傳』注の、姓名を載せずして杜注と異なるものも、亦た賈・服の舊説なり。凡そ此の若きものは皆な「注」と爲して、之れが申明を爲す。

「疏」中に載する所は、尊著の十に其の六を取る。其の顧（炎武）・惠（棟）の『補注』、及び王懐祖（王念孫）・王伯申（王引之）・焦里堂（焦循）の諸君子の説の采るべきものは、咸な與に登列す。皆な其の姓氏を顯らかにして、以て元凱（杜預）・沖遠（孔穎達）の襲取の失を矯す。末に始めて下すに己が意を以てし、其の從ふと違へるとを定む。

『左氏』の例の『公』・『穀』に異なるが若きに至りては、賈・服もまま『公』・『穀』の例を以て『左傳』を釋せり。是れ自ら其の罅隙を開き、人の以て攻むべきを與す。『春秋釋例』の一書に至りては、杜氏の臆説爲ること、更に論ずる無し。文淇の爲る所の『疏證』は、專ら訓詁・名物・典章を釋して、例は言はず。其の『左氏』の凡例は、別に一表を爲り、皆な『左氏』の例を以て『左氏』を釋す。其の知らざるものは、概ね闕如に從ふ。

さて劉文淇の終始一貫して変わらぬ主張は、『左傳』の義は杜預によって剝蝕〔けずりとる〕されており、そのやや見るべき解釈も「舊注」を襲取したものであり、『左傳』の真義は杜預以前の「舊注」によってのみ明らかにし得るものだ、ということである。したがって『舊注疏證』長編を作成するに当たり先ず最初に為すべきことは、失われた「舊注」の収集である。そしてこの「舊注」の主たるものは賈逵・服虔・鄭衆説であり、諸文献に引用された左氏の「舊説」である。その博捜の範囲は『國語』の韋昭注を始め『五經異義』・『説文解字』・『漢書』五行志・『周禮疏』・『儀禮疏』等に及んでいる。そして次に為すべきことは、この「舊注」の疎通証明である。これが書名「舊注疏證」の由来であり、この書のめざすべき目標であることは申すまでもない。

しかも清朝の左傳学は清初の顧炎武以来、杜預注を糾正することに主たる努力を重ねてきており、劉文淇に至るま

でにその成果の蓄積は多数にのぼるものであった。したがって次に為すべきことは、これら先学の研究成果の収集とその吟味検討である。

顧炎武『左傳杜解補正』　三巻　＊　惠棟　『春秋左傳補注』　六巻　＊
洪亮吉『春秋左傳詁』　二十巻　沈欽韓『春秋左氏傳補注』　十二巻
沈欽韓『左氏傳地理補注』　十二巻　焦循　『春秋左傳補疏』　五巻　＊

といった『左傳』の専著のみならず、王念孫・王引之の『左傳』の訓詁に言及するもの（主として『經義述聞』による）を網羅したことが、右の劉文淇自身の言葉に見えているのであるが、この他にも『舊注疏證』中に見える清朝学者の説は、『左傳』の専著だけに限っても、さらに以下のような諸文献を付け加えることができる。

毛奇齡『春秋占筮書』　萬斯大『學春秋隨筆』　十巻　＊
惠士奇『春秋説』　十五巻　＊　沈彤　『春秋左氏小疏』　一巻　＊
邵瑛　『劉炫規杜持平』　六巻　梁履繩『左傳補釋』　三十二巻
馬宗璉『春秋左傳補注』　三巻　＊　李貽德『春秋左傳賈服注輯述』二十巻
臧壽恭『春秋左氏古義』　六巻　朱駿聲『春秋左傳識小録』　二巻
丁晏　『左傳杜解集正』　八巻　顧棟高『春秋大事表』　六十六巻
高士奇『春秋地名考略』　十四巻　江永　『春秋地理考實』　四巻　＊
李富孫『春秋左傳異文釋』　十巻　成蓉鏡『春秋日南至譜』　一巻
阮元　『春秋左傳注疏校勘記』六十巻　＊

まことに博捜と申すべきであろう。ちなみに阮元の編纂に係る清朝学術の成果をまとめた一大叢書「皇清經解」が完刻されたのが道光九年（一八二九）のことであるから、これより以降のことはともかく、この書簡の書かれた時点で述

べている「草稿」すなわち「長編」の作成に際しては、あまり恩恵を被らなかったかも知れない（右の下に＊印を付けたのが、『經解』に収録された文献である）。そうだとすると、その収集の苦労は充分に察せられるところである。

また劉文淇の学問には、同学の士との間における切磋琢磨によって形成された部分が大きいのではないかと述べておいたが、『舊注疏證』中には、これらの人々のいまだ刊行されていない著書、いまだ著作の形を取っていない主張等も取り上げられていることも付言しておこう。直接に教示されたものも有ったであろうが、その多くは手紙のやりとりによって得た知見である。[4]

そしてこれら清朝の左傳学者のなかでも、特に沈欽韓の説は「十に其の六を取」ったというのであるから、その影響が大きいことは明らかであるが、しかし逆に「十に其の四」は採用されなかったり否定されたりしたということにもなるわけで、こういったところに劉文淇の厳しい批判の目の存在を知ることができる。彼にとって資料の羅列は単なる「長編」にしか過ぎない。「長編」に収集された資料は、彼の検討のふるいの目にかけられ、取捨選択された後、最後に始めて下すに自己の見解を以てし、その従うべきと従わざるべきとが定められるのである。そして「上は先秦の諸子を稽し、下は唐以前の史書を考し、旁ら雑家・筆記・文集に及び、皆な取りて證佐と爲し、實事に是を求むるを期し、左氏の大義をして炳然著明ならし」（『通義堂文集』巻十六）めたのである。しかも劉文淇が特に意図したことは、これら先学の姓氏を明記して、その出所を明示したことである。こういうところにも劉文淇の樸学大師としての誠実さが伺われるのである。[5]

したがって「長編」から最終完成原稿への道程は、「長編」の作成よりも長く厳しいものであることが我々にも容易に想像がつくところである。ちなみに清朝「新疏」の掉尾を飾る孫詒讓（一八四七—一九〇八）の『周禮正義』八十六巻は、同治の末年（十三年は一八七四年）に始めて長編数十巨冊が作成されたと思われ、これが完成して孫氏が序文を書いたのは光緒二十五年（一八九九）のことであるから、実に四半世紀の日時を要していることになる。そして『舊注疏證』

は、劉文淇の生前、その最初の一巻が作成されたのみで、子の劉毓崧、さらに孫の劉壽曾・劉貴曾に及んでも、やっと半ばを完成させるにとどまった。なぜなら彼らはいずれも短命で、劉壽曾・劉貴曾ともに清朝の滅亡を知ることなく、それぞれ四十五歳・五十五歳で没しているからである。

なお劉貴曾の一子劉師培は、その短い三十六歳の生涯中に、『劉申叔先生遺書』に収められる多数の著作を残した俊秀であって、彼こそが劉氏の家学を完成するであろうと期待されたのであったが、遺憾ながらそれも叶わなかった。その早世はいかにも惜しまれることである。『清史』儒林傳の稿本において、劉氏三代の未完の『左傳』学を記述した後、「いま子孫邪説に惑溺し、經を離れ道に畔き、この事ほとんど望み無し、哀しい哉」とあるのは、当時、革命運動に身を投じ、清朝政府から危険人物視されていた劉師培を指して非難したものだという。[6] 激動の時代は、劉師培をして漢学の中に埋没せしむるを許さなかったのであろう。

以後、「長編」と未完の「原稿」は代々劉家に伝えられていたものと思われるが、辛亥革命を経て中華民国の成立、そして日中戦争を経て中華人民共和国の成立を見る間に、「長編」の存亡はとうとう不明となってしまった。ところが幸いにも、原稿（隱公元年より襄公五年まで）の方は上海歴史文献図書館に所蔵されていたのである。それが中国科学院の歴史研究所第一、二所資料室の手によって整理工作がなされ、句読を切ったB5判の活字本の本文一千頁を越える巨冊として科学出版社から公刊されたのは、一九五九年のことであった。[7] かの「金陵の約」より実に百三十年後ということになる。この書物の出版によって我々は始めて劉氏三代の左氏学の実体を、その半ばまでは伺い知ることができることとなったのである。書中、断案を下す表現として「文淇案」とあるのは申すまでもないが、また「壽曾案」とか「貴曾案」という表現もあって、この書物がまさしく劉氏三代の努力の結晶であることを示しているのである。これを見るに及んでは、筆者はまことに肅然たる思いを禁じ得ない。なお付録一の劉文淇を中心とした劉氏一族の「家系図」を参考されたい。

さて最後に、『春秋左氏傳舊注疏證』に対する現在の評価について述べておこう。これについては、原稿整理に当たった「中国科学院歴史研究所第一、二所資料室」の手に成る「整理後記」が極めて要領よくまとめているので、それを紹介したい。長所二点、短所三点がそれぞれ挙げられている。

長所　一　収集した材料の豊富さ。賈服注はこれによってほとんどが網羅されている。

二　『春秋』を解釈するのに、必ず禮を以て明らかにしていること。したがって典章制度・服飾器物・姓氏地理・古暦天算・日食晦朔・鳥獸蟲魚の訓詁はこれ以上は望めないほどに詳細である。

短所　一　漢学はすべて良しとし、杜注をことごとく廃していること。公平とは言い難い。

二　資料を羅列するのみで、断案を下していない箇所が有ること。是非の判断がつきかねる。

三　人物の引用のみで、書名を明記しないものが有ること。正確な引用でない箇所が有ること。これは未定稿によるものであろう。

右の評価は極めて妥当な見解である。長所として指摘される収集した資料の豊富さ、訓詁の詳細さは、そのまま「長編」の充実を示すものでもある。それゆえに『舊注疏證』の未完とともに、「長編」の亡佚もまた惜しまれることである。ちなみに現行本『舊注疏證』には、その「原稿」と「清抄稿」、そして「提綱稿」の写真がそれぞれ二葉ずつ付録されているが、このうちの「提綱稿」が筆者には興味深い。これはいわば劉文淇の「構想メモ」であって、ここには経伝の文章の引用に続けて「舊注」の有無（つまり「服」・「賈服」の表記のみで、注の文章の引用は無い）を記し、ついで「疏證」に引用するはずの文献、あるいは先学の名前のみが、たとえば

○　晉世家　杜（預）　江（永）　沈（欽韓）　洪（亮吉）

○　年表　楚世家　周本紀　江永

○　杜注　沈欽韓云　二兄云　齊世家

というような形で記録されている。そしてこれらの本文がすでに「長編」中に収録されていたことは言うまでもなかろう。「長編」に収集された資料の中から何を選び出し、これを如何に関連づけ、どのような判定を下すか。これこそ「長編」作成以上に、時間と体力と精神力を要する作業であった。右に短所として挙げられた二・三は、やはりこの書物が未定稿の部分を含んでいるためだと思われる。

なお短所の一は、劉文淇の学問がいわゆる「漢学」の域を出なかったことを意味するものであるが、しかしそれはまた清朝考証学の持つひとつの限界でもあった。「舊注疏證」という書名そのものが内容を的確に示しているのである。したがって、「舊注」の存しない箇所については、その考証が簡略になる傾向が有る。また最大の長所が、逆に欠点ともなり得るという皮肉な一面もある。それは劉文淇の考証があまりに詳細であるため、その全文を読まなければ結論が容易に分からない場合も少なくないということである。

以上のごとき点からして、『舊注疏證』が未完であることをも併せ考えるとき、『左傳』の注釈書として我々は、近時出版された揚伯峻氏編著に係る『春秋左傳注』[8]に軍配を挙げざるを得ないであろう。この揚氏『春秋左傳注』は、劉文淇以後の諸氏の説をも含めた清朝考証学の精華を摘んで、その上に民国以来の甲骨・金文学等の成果をも取り入れた注釈書で、しかもその注釈はまことに簡にして要を得たものである。さらに姉妹編として『春秋左傳詞典』が用意されているのも学徒には甚だ便利である。今後はこの書物がスタンダードな注釈書になることであろう。我が国でも小倉芳彦氏によって、この揚氏『春秋左傳注』に基づいた翻訳書として、岩波文庫本『春秋左氏伝』（上中下三冊本）が一九八八年から八九年にかけて出版された。

しかしそれにもかかわらず、筆者は、唐代以前の史書に見える『春秋』・『左傳』に言及する記事を博捜網羅し、清朝考証学の豊富な成果を眺望することができる劉文淇『春秋左氏傳舊注疏證』は、依然として利用価値の有る注釈書として、これからも存在意義を持ち続けると考える次第である。

（4）　同年輩の学者ではないが、黄承吉に宛てた書簡（道光十五年）の中に、「示されし所の左氏の四義、文淇已に拙著疏證中に摘入せり」（『青溪舊屋文集』巻三）とある。黄氏の書簡は、その『夢陔堂文集』巻四に「與劉孟瞻書」として、実に二万二千字に垂んとする長文から成るもので、僖公二十三年・宣公十二年・襄公二十五年・三十年の伝文についての詳細な考証論文である。そして我々は現行本中に黄氏の説を確認できるのである。

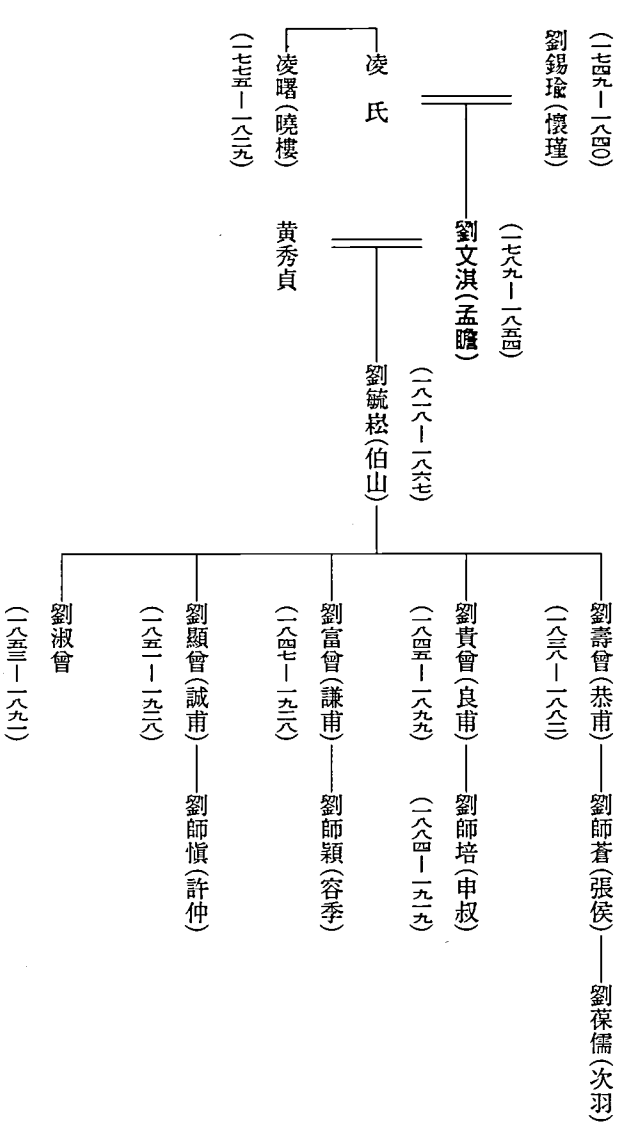
（5）　我が国の『左傳』注釈書の中でも白眉と称される竹添井々『左氏會箋』は、我が国の『左傳』研究の成果を踏まえた上に、劉文淇と同様に清朝考証学の成果をも取り込んだ優れた著作ではあるが、しばしばその出典を明記していないことが欠点の一つであることは、従来指摘されていることである。

（6）　小島祐馬氏「劉師培の学」（『中国の社会思想』筑摩書房所収　一九六七年）による。

（7）　この書のリプリント版には、筆者の知る範囲では、先ず香港の太平書局版（一九六六年）が早く、次いで台北の明倫出版社版（一九七〇年）、日本京都・中文出版社版（一九七九年）、さらに台北・大化書局版（一九八二年）が有る。

（8）　北京中華書局から四冊本として、一九八一年に出版された。その「修訂本」は一九九〇年刊。なお台湾の影印本も二種類有るようである。

付録一　劉文淇家系図


（一七四九—一八四〇）
劉錫瑜（懷瑾）
（一七八九—一八五四）
劉文淇（孟瞻）
凌　氏
（一八一八—一八六七）
劉毓崧（伯山）
凌曙（曉樓）
（一七七五—一八二九）
黄秀貞
劉壽曾（恭甫）
（一八三八—一八八二）
劉師蒼（張侯）
劉葆儒（次羽）
劉貴曾（良甫）
（一八四五—一八九九）
劉師培（申叔）
（一八八四—一九一九）
劉富曾（謙甫）
（一八四七—一九二八）
劉師穎（容季）
劉顯曾（誠甫）
（一八五一—一九二八）
劉師慎（許仲）
劉淑曾
（一八五三—一八九一）

劉文淇左傳學研究

野　間　文　史

本稿是給清朝左傳學者劉文淇：『左傳舊疏考正』的日語翻譯載上的解題。其内容的概要如下。

1．劉文淇的生平　　乾嘉之學／父劉錫瑜／劉寶楠／金陵之約／阮元

2．劉文淇的學問和著述　　洪梧／包世臣／凌曙

（1）春秋左氏傳舊注疏證　　長編／與沈欽韓書／中國科學院歷史研究所

付録1　劉文淇家系圖

（2）左傳舊疏考正　　劉寶楠／沈欽韓／黄承吉

（3）其他的著書

（4）劉毓崧和劉壽曾

3．左傳舊疏考正解題　　自序／體裁／底本／包愼言／後世的評価／版本

付録2　劉文淇略年譜